

私立大学研究ブランディング事業

29年度の進捗状況

学校法人番号	341011	学校法人名	広島文化学園		
大学名	広島文化学園大学				
事業名	地域共生のための対人援助システムの構築と効果に関する検証				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	1634人
参画組織	広島文化学園HBG対人援助研究センター、看護学部・看護学研究所、学芸学部・教育学研究科、社会情報学部・社会情報研究科、人間健康学部				
事業概要	支援を必要とする子ども、障害児・者、高齢者・認知症者が健康に暮らす共生社会の実現のために、HBG対人援助研究センターを核として、集いの場となる「来んさいカフェ」を提供する。看護・医療福祉、スポーツ・健康福祉、子ども子育て・教育福祉の3研究部門から、「カフェ」における対人援助プログラムと持続可能な地域支援サポーター養成プログラムの開発と検証を行い、本事業が地域の活性化に結びつくことを実証する。				
①事業目的	<p>平成27年度の国勢調査によれば、我が国の高齢化率は26.7%であり、平成47年に33.4%になると推計されている。超高齢社会と少子化が同時に進行することへの対応は、わが国の最重要課題の一つである。本学のキャンパスがある呉市(人口23万人)、広島市安佐南区(人口24万人)の高齢化率は、呉市32.6%、広島市安佐南区19.5%であり、15歳未満児童の割合は、呉市11.5%、広島市安佐南区20.0%であり、地域により人口構成の特徴が異なり、地域のニーズに違いがある。</p> <p>乳幼児から高齢者、障害のあるなしにかかわらずすべての人々が健康に暮らす共生社会を実現し、自治体の掲げる「地域共生、ふれあいの安心まちづくり」を目指し、地域の生活課題を住民が主体となって解決する」活動に参画し地域活性化に資するために、HBG対人援助研究センターを核として、以下の4つの研究を実施する。(1)看護・医療福祉研究部門では、高齢・認知症者の健康維持・増進、生きがい、日常生活動作の維持・改善を図るために、「来んさいカフェ：呉」におけるHBG看護カフェプログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。特に、これまで看護・医療と福祉の分野で個別に行われてきた分野を有機的・総合的に関連づけた総合医療福祉の観点から支援の有効性を研究・検証する。(2)スポーツ・健康福祉研究部門では、障害の有無にかかわらず、子どもから高齢者まで身体活動能力が異なる人たちが共に運動やスポーツを行うインクルーシブ・スポーツを実践する「来んさいカフェ：坂」におけるHBG健康アダプテッドプログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。(3)子ども子育て・教育福祉研究部門では、「来んさいカフェ：広島」における障害のある子どもや障害児子育て支援に関わっている人々の課題や問題の解決のために人間の原感覚に働きかけるHBG子育て支援プログラムを開発し、その支援の有効性について研究・検証する。(4)さらに、すべての部門の「来んさいカフェ」において、困難を抱える人を支援する人(施設職員、介護をする人、中学生や高校生)のための地域支援サポーター養成プログラムの開発と検証を行う。</p>				
②29年度の実施目標及び実施計画	<p>【目標】 前年度の対象者及び地域のニーズ及び実態調査結果に基づいて、3研究部門毎に「来んさいカフェ」に支援対象者に来てもらうための手続き等を確定する。また、支援対象者の支援前の状況・心理的・生理的指標によるベースラインを把握する。さらに、地域支援サポーター養成のためのプログラム案を作成し、実施する。</p> <p>【実施計画】 研究部門ごとに、前年度の関係機関、地域の自治体との連絡調整により確保した研究協力者、支援対象者に対する対応手続きを確定する。看護・医療福祉研究部門では、「来んさいカフェ：呉」に参加した高齢者・認知症者の健康の程度、生きがい、日常生活動作のベースラインを測定し、高齢者支援HBG看護プログラムを試行する。スポーツ・健康福祉研究部門では、「来んさいカフェ：坂」に参加した障がい者(肢体不自由)・高齢者の健康関連のQOLのベースラインを測定し、HBG健康アダプテッドプログラムを試行する。子ども子育て・教育福祉研究部門では、「来んさいカフェ：広島」に参加した子ども、保護者を対象として、発達や発達課題、不安等のQOLのベースラインを測定し、HBG子育て支援プログラムを作成し、実施する。</p> <p>また、地域支援サポーター養成のためのプログラム案を作成し、試行する。看護・医療福祉研究部門では、「来んさいカフェ：呉」において、地域の民生委員、高齢者福祉施設の職員などを対象に支援サポーター養成プログラムの作成し、試行する。スポーツ・健康福祉研究部門では、「来んさいカフェ：坂」において、高齢者施設や障がい者施設の職員などインクルーシブ・スポーツ実施時の支援サポーター養成プログラムの作成し、試行する。子ども子育て・福祉研究部門では、「来んさいカフェ：広島」において、子ども・子育て支援サポーター養成プログラム、食育支援サポーター、音楽サポーター養成プログラムを作成し、試行する。いずれの部門のプログラムについてもその課題を修正し、信頼性・妥当性を高める。また、サポーターの活動組織の形態・システム等について検討する。</p>				
③29年度の事業成果	<p>1)研究の推進</p> <p><対人援助研究センター> ア 文部科学省指定H28進捗状況報告書の作成 イ 研究活動備品の購入及び設置 ウ 対人援助研究センター(長東CP)の新規施設設置 エ 教員資格と研究領域の公表 オ 対人援助研究センター会議の開催7回、看護・医療福祉研究推進会議7回開催、スポーツ・健康福祉研究推進会議7回開催、子ども子育て・教育福祉研究推進会議17回開催 カ 全教職員を対象とした研修会の実施 キ 全学講演会の開催(講師：広島大学 辻敏夫教授) ク 全教職員を対象とした平成29年度報告会の実施</p> <p><看護・医療福祉研究部門> ア 認知症カフェ「あがりんさい」の4回開催 イ 高齢者カフェ出張4回 ウ 認知症サポーター養成講座の5回実施 エ 高齢者・認知症カフェにおけるサポーター養成プログラムの実施・検証 オ 公開講座の開催4回 カ 出張カフェ・個別・学内カフェにおける縦断的な健康調査を実施と効果的な活動(エクササイズ)の提案とその効果法について検証 キ 学内紀要2編</p> <p><スポーツ・健康福祉研究部門> ア 呉市1020人を対象とした「高齢者健康調査」アンケートの実施 イ HBG重度・重複障害児スポ・レク活動教室「はなまるキッズ」の開催及び第48回博報賞 加地信幸講師が受賞 ウ 「HBG健康アダプテッド・スポーツプログラムの試行」 エ 「坂町高齢者アダプテッド・スポーツ教室」の開催 オ 公開講座の開催 カ 学会発表2件、学術誌投稿3編、学内紀要1編</p> <p><子ども子育て・教育福祉研究部門> ア 来んさいカフェ広島の開催 イ 発達障害支援に係る心理・神経心理アセスメントやカウンセリングのための客員研究員の配置 ウ スノーズレン体験による痛み緩和に関する生理心理学的検証 エ 子育て中の親に対する食育支援プログラムの作成と検証 オ 来んさいカフェ・きつずの出張開催(子育て支援、食育相談) カ 高齢者施設を対象とした音楽療法による支援プログラムの作成 キ 高齢者における水分摂取前後の心拍変動への生活習慣及び体組成への影響の検証 ク きおんひろば文化祭での出張カフェ ケ スノーズレン研修会の2回実施 コ 学内紀要5編、学術雑誌1編、学会発表2回</p>				

<p>③29年度の事業成果</p>	<p>2) 研究成果の公表 ア 文部科学省指定平成28進捗状況の報告書をHPに掲載 イ プレスリリースの方法・原稿の作成についての共通理解 ウ 対人援助研究センターリーフレットの作成 エ 平成28年度本学独自の研究活動報告書を作成し、全国大学・県内高校・関係機関に送付 キ 研究ブランディング事業の新規ホームページの作成・更新</p> <p>3) 外部評価体制の整備 ア 平成28年度事業に対する外部評価委員会を開催し、外部評価委員会の結果と自己点検評価を作成公表（平成29年5月30日） イ 平成29年度事業に対する外部評価委員会を開催し、外部評価委員会の結果と自己点検評価を作成公表（平成30年5月30日）</p> <p>4) 関係機関との連携 ア 呉市連携推進会議の開催及び呉市文化スポーツ部スポーツ振興課と共同で社会調査の実施 イ 呉市民生委員児童委員正副会議の開催 ウ 安佐南区認知症地域支援推進員と社会福祉法人燈心会三滝苑との意見交換会 エ 長東及び長東西の社会福祉協議会と民生委員との意見交換会</p>
<p>④29年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>【自己点検・評価】 ア 研究ブランディング事業の新規のホームページの作成時期は計画より遅れたが、本学研究ブランディング事業の研究成果や来んさいカフェの実施状況を掲載、逐次更新し学内外に周知できた。また、平成28年度の本学独自の研究活動報告書を作成し、全私立大学、県内高校、関係者等に送付し、本学の研究活動について全国に発信できた。イ 外部評価委員5名により、外部評価委員会を開催し、平成28年度の研究活動を報告するとともに、事業の取組に対して、おおむね肯定的評価を受けた。意見交換での指摘事項に基づいて、平成29年度の事業を展開し、平成30年5月に、平成29年度の外部評価を受け、HPや報告書に掲載した。ウ スポーツ・健康福祉研究部門（坂キャンパス）では、呉市文化スポーツ部、健康福祉部を中心とした連携推進会議を呉市役所で行うなど、行政と連携を図ることにより、呉市の1000人以上の高齢者の健康調査を実施することができ、調査研究報告につながった。エ 看護医療福祉研究部門では、呉市民生委員児童委員正副会議を呉市役所で開催し、呉市の民生委員と児童委員、呉市福祉保健課に研究成果を公表し、今後のカフェ運営について意見交換を行い、改善点を見出すことができた。オ 子ども子育て・教育福祉研究部門（長東キャンパス）では、長東と長東西地区の社会福祉協議会と民生委員に対して新たに設置した対人援助研究センターの施設を公開し、施設利用や来んさいカフェの運営方法などについて理解が深められた。また、安佐南区認知症地域支援推進員や高齢者施設三滝苑職員との安佐南区のカフェ運営の実態やスノーブレンの利用可能性について意見交換を行い、安佐南区への事業展開のきっかけを作った。の拡大の第一歩</p> <p>【外部評価】 <総評> ア 地域のニーズにあわせた取り組みが進んでおり、事業の確実な遂行がうかがえた。地元の行政機関との連携もよくできており、このままのペースで事業を推進できれば、事業の目標を達成するのはほぼ確実だろうと思われる。今後は、地域支援サポーターの養成と研究活動の面でのさらなる発展が望まれる。イ 本事業では、従来型の「来んさいカフェ」の運営に加え、出張カフェを行い、来所しない・できない住民にも配慮している点が素晴らしいと思う。ウ 各部門における取り組みは、PDCAサイクルなどを用いて常に評価・修正ができており、全体として事業が順調に進行していることが確認できた。主に対人援助に注目した事業内容は、新規性や独創性が高く、有意義な取り組みであると感じた。特に本年度は、各部門における基礎的研究が活発に行われており、それらの一部がすでに研究成果として発表できていることは高く評価できる。エ 各部門がそれぞれの学部や専門と連携していることは素晴らしいし、地域共生や地域活性を主なビジョンとしている点も高く評価できる。オ 本事業は、研究成果の発表による研究機関として、学生の対人関係能力を高めるための教育・研究機関として、各地域の課題の解決に向けた取組を通じた地域貢献によるブランドイメージの強化などの効果が見込める事業であると感じた。</p> <p>【個別の評価】 <事業推進体制等>ア 学生も積極的に参加し、地域の団体とも連携が十分にとれ、大学全体として組織的に動く事業体制は高く評価できる。イ 組織的に取り組むプロジェクトとして、集いの場となる「来んさいカフェ」が各部門で展開されており、地域共生や地域活性に貢献する可能性が大きく、将来のビジョンが描けている点も素晴らしい。また、本年度は全体の研究成果報告会や講演会を開催するなど、アクティビティが高いことも評価できる。ウ 各キャンパスの所在する地域のニーズの中から、各研究部門のもつ専門性を生かした事業となるように研究課題を設定しており、大学のもつ多様な専門性を地域に還元する事業推進体制となっていると思う。</p> <p><調査・研究の活動等>ア 平成29年度には、学術講演会や3部門それぞれの「カフェ」や公開講座などが多数回開催され、活動が充実してきたことがうかがえた。特に、「カフェ」に関しては、大学主催のものだけでなく、地域からの要請に応えたものも開かれており、事業が地域に根差しつつあることがうかがえる。イ 3研究部門とも、研究ブランディング事業の特徴をいかしたプログラムが展開され、客観的指標を用いた事業報告が多くあり、高く評価できる。さらに、これらのエビデンスに基づいた研究成果を学会で発表したり、国内および国際誌に論文を投稿している部門もあり、これらは高く評価できる。ウ 看護・高齢者カフェ及び認知症カフェの取組は、大学の専門性とマンパワーが生かされた、研究及び福祉的な取組であり、調査・研究終了後の地域福祉及び学生育成の両面を見据えた取組となっていることが意義深いと感じている。</p> <p><課題と改善点>ア 大学のブランド力を高めるためには、まず、「大学」を知ってもらう必要があり、この出張型カフェの取組のなかで、大学が実施している意義、来所した際の効果、大学内の来んさいカフェの雰囲気などが分かるように広報のあり方を検討し、大学への地域住民の来学を促進できるとよいと思う。イ 分野にもよるが、調査状況に影響されやすい主観的なアンケート項目が比較的多いと感じる。また、各項目の対象者の数が少なく、調査・研究期間やデザインに鑑みて因果関係の不明瞭なものが比較的多いと思う。一方、基礎的研究では、心理的指標や生理的指標など、様々な客観的指標を測定しているが、その中には個人差が大きかったり、測定誤差が大きいものがあり、解釈に難しいものもあった。本調査・研究成果を一般化・普遍化するためには、もう少し客観的な測定変数を含めて結果の曖昧さを減らし、対象者を増やしながら前向き（縦断的）に調査を継続することが大切であると考えられる。ウ 3部門をどのように統合し、HBGブランドとして確立していくのが今後の課題になるように思えた。特に、研究面では部門を超えた共同研究が可能なように思われる。エ 各部門において、どれだけの学生が関わっているのが明確ではなく、あまり多くない印象を受けた。サポーター養成プログラムをさらに充実させたり、大学のカリキュラムに事業を盛り込むなどの検討も必要であろう。オ 学生の学びの場として、地域貢献の場としての取組の意義や具体的な取組内容を学生に伝え、研究の認知度や参加意欲を高め、参加したことを誇りに思えるように取組を進めていくことが大切なことだと思う。カ 各研究部門で実施されている研究は、各キャンパスの周辺地域の大きな課題であるとともに、地方の高齢化問題（たとえば心身の健康寿命をどう伸ばしていくか）、都市部の子育ての課題（増加している発達障害等の子育てをどう支援していくか）について、地域として何が取り組めるのかという、日本全体に当てはまる研究であると感じている。</p>
<p>⑤29年度の補助金の使用状況</p>	<p>ア 研究備品の購入 イ 講演会講師謝金・旅費 ウ 外部評価員謝金・旅費 エ リーフレット・報告書印刷費 オ ホームページ制作費 カ 助教人件費 キ データ入力等補助員人件費 ク 公開講座講師謝金・旅費 ケ 講演会公開講座実施のためのチラシ印刷代 コ Nシステム（健康管理システム）委託費 サ カフェ開催用検査消耗品 シ 統計解析ソフトの購入 ス 脳波計電極等の購入 セ 臨床心理士雇用費 ソ 対人援助研究センター・来んさいカフェ施設消耗品 タ 学内スノーブレン研修会講師謝金・旅費 他</p>